

# 作業の指示を集中して聞こうとする子

— 作業学習の指導を通して —

八 木 啓 子

## 1. 対象児のプロフィール

生徒名 S・N（男） 昭和46年1月18日生（高等部1年）

I Q 測定困難 中度精神遅滞 自閉的傾向

### (1) 一般的特性

- ・ 一度身につけた生活のパターンは、正確にこなしていくが、新しい環境や場面に対しては抵抗が大きく、生活の幅が拡がりにくい。
- ・ 友だちとのかかわりを進んで持とうとしないが、声かけがあれば仲間に入ることができる。

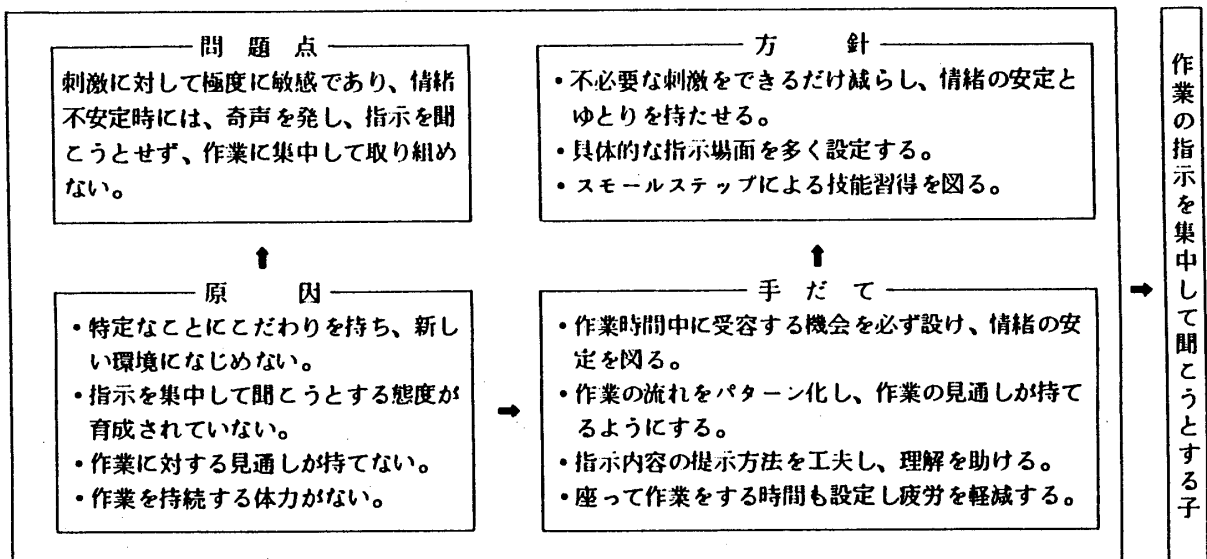
### (2) 問題点と研究に取り上げた理由

本児は、できることは限られてはいるものの、指示されたことを集中して聞き取りさえすれば理解も早く、指示されたことを行動化することもできる。また、集中できる時間は短い、作業を器用にこなす面も見られる。こういった理解力、器用さを生かし、将来に向けて職業生活への可能性を引き出したいと考えた。潜在している能力を引き出す為には、まず、指示を集中して聞く態度、集中して作業する態度を育成する必要があると考え、研究として取り上げた。

## 2. 個人目標の設定と研究方法

### (1) 個人目標の設定

上記の問題点から、S・Nの目標を「作業の指示を集中して聞こうとする子」と設定し、次のような考え方に基いて、アプローチすることにした。



## (2) 研究方法

S・Nは印刷班に属して作業学習を行っている。印刷学習では、取り扱う題材が「文集」「挨拶状」「表彰状」「名刺」「封筒」「暑中見舞い状」「年賀状」「メモ帳づくり」「はしおきの台紙印刷」と異っていても、「受注→文選→組版→印刷→解版→返し」といった作業工程は同じであり、作業をパターン化するのに適している。作業の見通しがたて易い。3時間連続の学習時間であるために、集中して作業をする訓練の場として適している、といった利点から、印刷学習に重点をおいて取り組むことにした。

各工程の技能習得の過程で、指示を集中して聞く態度、集中して作業に取り組む態度を育成することを意図しての取り組みである。

## 3. 授業の構成と指導上の配慮

### (1) 授業の構成

一学期間は、印刷室や印刷班の生徒、クラス担任ではない指導者に馴れることを第一の目標とした。二学期は、技能の習得に視点をあてて指導を行った。

- ・一学期の学習内容……作業服・うでぬきの着用、はじめの会・終りの会の発表の仕方、活字箱の持ち方、活字の上下の見分け方、5号のひらがな活字の返し方、メモ用紙の糊づけ
- ・二学期の学習内容……部首表の読み方、18ポ活字の返し方、解版の方法、コミの整理、インテルの整理、漢字活字の返し方、封筒の刷り方

### (2) 指導の手だて

指導にあたっては、特に次の点に配慮した。

- ① 不必要な刺激を与えないように環境を整備し、情緒の安定を図る。
- ② 指示は単純明解にして、指示を出す者を限定する。
- ③ 印刷の各工程をできるだけ経験させて、作業全体への見通しを持たせる。

## 4. 指導実践例

### (1) 4月当初の印刷学習時における本児の実態

- ① 高等部の職業コースは、学年を解いた縦割り編成のため、上級生を上目づかいに見たり、何もせずにビービー泣いたり、情緒的に不安定であった。
- ② 指示されたことに対し、泣くことにより拒否を示し、指導者に1対1で甘えられる時のみ作業に取り組めた。
- ③ 作業に飽きると、すぐに黙ってトイレに入ってしまう、水道の水を流して遊び、なかなか部屋に帰ってこないことが多かった。
- ④ 製本機や裁断機に非常に興味を示し、メモ用紙の糊づけ作業を喜々として行った。
- ⑤ 体力的にもひ弱さが目立ち、鼻汁が出る、咳が出る等の不調な状態が続いた。

⑥ 指示された言葉をオーム返しで言うが、指示内容の理解はなされていない時が多かった。

(2) 校内職業実習(年賀状印刷)時の指導

11月27日より9日間実施された校内職業実習は、生徒13名と教員4名が1日6時間、年賀状の印刷に取り組む実習である。

年賀状印刷は、外部からの注文も受付けており、注文された賀状を早く正確に美しく仕上げ、代金をもらうことから、社会とのつながりが強い実習であるといえる。印刷学習では、受注→文選→組版→印刷→解版→返し→包装→納品といった一連の工程が繰り返されながら行われ、各作業の間に強い関連性があり、1つの作業工程が遅れると、全ての作業に遅れが出るといった特徴がある作業である。「返し」の作業を担当した本児の9日間の作業の実態と指導の手だては次のとおりである。

	作業の実態	指導の手だて
一日目	<p>〔18ポ漢字活字の返しをする。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>おとなしいOと一緒に返す時は、返す場所がわからなければ、声かけをされるまで二人で同じ所にじっと座っている。</li> <li>おせっかいなUの場合は、一人で説明して一人で返しをする為に、S・Nはついて歩くだけ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字の返し方を十分にマスターしていないS・N一人で作業させるのではなく、一年生のおとなしいOと二年生で少々口うるさいが、返す能力が高いUが交代で本児の個別指導をするようにする。</li> <li>*実習中は生徒数が多く、指導者が常に本児の側で指導できない実態がある。</li> <li>Oに対しては、手持ち用の部首カードを用いた教え方を指導する。</li> <li>Uに対しては、S・Nに活字を持たせて、部首カードをS・Nに声を出して読ませるように指導する。</li> </ul>
二日目・三日目	<p>〔わからない時には、先生に聞きながら返す。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Oは二人で手をつないで、うろうろすることが多く、返した活字数は、10字。</li> <li>Uの指示で、「八木先生わかりませーん」と何回も聞きにくる。返した活字数は、32字。</li> <li>Uに「早くしなさい」とか「そこじゃないでしょ」など口うるさく言われ、泣き声が出る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>部首がわからない時には、先生に聞くようにOとUに指導する。</li> <li>OとUは交代で「刷り」をしており、「刷り」をしない時に本児の指導を行う。</li> <li>Uに対し、本児に口うるさく言うと、それにおびえてしまい、いくら上手に返し方を教えても覚えようとしないうことを強調し、指導する。</li> </ul>
四日目	<p>〔部首カードを目で追いながら字をさがす。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>返す場所を覚えてしまった字(山、子、大……等)も増え、調子よく返す。</li> <li>二年生Sに突然つねられて泣く。以来Sがいる活字箱の近くには近寄れず、返しができなくなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「返し」が早くなったことを誉め、シールを貼り意欲を持たせ、Oにも指導が旨くなったことを告げて誉める。</li> <li>Sを「刷り」担当に移動させ、本児の指導はOだけにする。Uは「組み」に移動する。</li> </ul>
五日目・六日目	<p>〔壁に貼ってある大きな部首表を目で追い、部首を見付ける。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>指さしをしながら部首表が読めるようになり番号を読み取り、活字箱をさがす動作が早くなり、50字程度の返しができる。</li> <li>手持ち活字がなくなると自主的に5号活字を返す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>部首名を声を出して読み、番号を言い、大きい声で先生に番号の報告をした上で返すパターンを繰り返すことによって、返しのパターンを定着させる。</li> <li>S・Nが自主的に5号活字を返そうとした時は、みんなに知らせて、大いに誉める。</li> </ul>

七日目・八日目	<p>〔一人で返しをする。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Oが休んだために、1年生のHを代りにつけたところ、Hが口うるさく指示をしたことに対して、自分の足をたたきながら「やめんさい」と大声で泣きわめく。</li> <li>・落ち着きをとれどした後、一人で返しをする。</li> <li>・同じ字の活字を箱の中でまとめておいて、一度に返す等、要領よく工夫して活字返しをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シールが確実に増加していることを、表と一緒にしながら確認させる。</li> <li>・かんしゃくがおきたため、直ちにHを「文選」に移動させ、本児の担任と指導者と交代で肩を抱き、落ち着かせる。</li> <li>・担任と指導者は受容する形をとり、他の指導者一名は「うるさいから泣くのは止めなさい。」と強い口調で注意をする。</li> </ul>
九日目	<p>〔返しの作業に自信をもち、多くの字を返そうとする。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人で鼻うたを歌いながら調子よく返す。</li> <li>・活字ケースの表示部分を活字でたどりながら字をさがすという本児独特の方法で、作業に集中して取り組む。</li> <li>・返し活字が入った箱を下に置かずに、手に持ったまま返しをする。</li> <li>・4号活字の返しを抵抗なく行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9日間の成果を具体的に挙げて誉める。</li> <li>・1日も休まず、黙ってトイレに逃げることも一度もなく、返す活字の数も毎日増加している点を大いに誉めて、共に喜び合い、成就感を持たせる。</li> </ul>

## 5. 考察と今後の課題

校内職業実習（年賀状印刷）でのS・Nの「返し」技能の向上はめざましいものがあった。と同時に、態度面においても次のような変容が見られた。

- (1) Oに手を引いてもらいながらついてまわる。 → 一人で活字を返すことができる。
- (2) わからない字は黙って手に持っている。 → 「八木先生わかりません」と聞きにくる。
- (3) 評価表にシールがなくても平気である。 → シールを何枚はるか聞きにくる。
- (4) 部首表をみようとししない。 → 壁の部首表を指さしして、番号がいえる。
- (5) 手持ちの活字がなくなるとブラブラ遊ぶ。 → 時々ではあるが自主的に次の返しをする。
- (6) すぐにペタッと座り込む。 → 立ったままで作業する時間が長くなる。
- (7) 同じ事を何回も言われて、ようやく動く。 → 一回の声かけで動けることが多くなる。

以上の点からも、安定した状態にいてこそ認知できる特性を持つ本児の指導としては、情緒の安定を図りながら、作業の見通しを持たせて「返し」指導をするなかで、本児の問題点を改善しようとした試みは、まちがっていなかったように思う。しかし、今回の実習では人間関係や作業内容を限定した環境の中での実施であり、今後は、こだわりの強い特性を緩和しながら、幅広い適応能力を身につけていくことが、本児が将来、社会生活を送る上に非常に重要になってくる。と同時に現在、担任が行っている毎日の食事指導、体力作りにより、作業を持続できる力を身につけることも大事な課題になるであろう。

今後は、本児の器用さを生かし、各印刷工程の技能を習得する過程の中で、よりいっそうの集中力の育成と技能向上を図り、生活場面の拡大を図っていきたいと考える。